

◇コラムを読んだの雑感

大槻伸次

以前、M新聞の「つむじ風」というコラムを興味深く読んだ。その内容は千葉県香取市のIさんという方の米作り体験を綴ったものであるが、筆者が云わんとしていることは政治の停滞を招いている政治家等の指導的な立場にある人達への、コメ作りに例えての痛烈な苦言だったのです。

Iさんは田を耕さずに米を作り、農家の労働を軽減し美しい自然を蘇らせることに成功したという。水田が、今のように頻繁に耕されるようになったのは田植え機の導入と関連があるそうです。稲の苗は田植え機の規格に合わせた稚苗が普及したことにあるという。稚苗は葉が2枚半で根もか細く、か弱いから稚苗でも育つようにと土壌を掘り起こし柔らかくする必要がある。ところが、Iさんは80年代初め、東北の冷害のとき僅かに実った稲を調べたところ手植えだったことに着目したという。そして、試行錯誤の末、耕さない田に成苗（葉が5枚）を植える「不耕起移植栽培」という手法に辿り着いたそうです。耕さない硬い田に耐えた稲は強い根を張り、病気や冷害に負けないというのです。私が住んでいる周辺でも夏場の一時期、土用干しとかいって稻田の水を断つが、似たような効果を狙ったものであろう。（水を断つというショックを与えると、稲は水を求めてしっかりと根を張るという。）

翻って、現在の政治家を始めとし経済界、芸能界、スポーツ界等を俯瞰すると2世、3世が主力になりつつある。中でも、問題とされるのは政治家の世襲であり、2世～3世議員は親が耕した地盤とカバンを継承でき、地域の問題にも精通し、有権者の信頼が得られ易いという大きなメリットがある。そこで、スタートラインからして他の候補より有利なハンディーがあり公平さを欠いているとの批判がある。

世襲の弊害として云われているのは、様々な階層の人達の多様性が政治に反映されにくくなり、政治が停滞することに繋がってしまうということである。

また、荒波に揉まれていないためひ弱に育ち（温室育ち）逆境への対応力に問題点がある。思い当たる事例として、過去に私たちが住んでいる地域の代議士が、汚職事件で辞職し自死を謀って地域の利益代表が突然消えてしまったことがあったが、この件こそまさに温室育ちのお坊ちゃんで、典型的な3世議員だったのである。

今年は2022年の半ば（7/10）、参院議員の改選が行われるが、一考に値するだろう。

（2022/6/22 記）

